

銀杏 BOYZ : 峯田和伸の歌詞が描き出す世界

- はじめに

峯田和伸とは、主に 1990~2010 年代の日本男児にとって新しい形の憧れとなったパンクロッカーである。キャリアの流れとしては、1996 年に青春パンクバンド、GOING STEADY (以下ゴイステ) を結成し、音楽活動を開始。2003 年、人気絶頂時にバンドは解散したものの、その後すぐに銀杏 BOYZ を結成し、前バンドと同じくボーカル・ギターを担当。後のメンバーの立て続けの脱退を経た現在もソロにて活動を続けている。

峯田は活動期間を通して作詞作曲を務める傍ら、俳優業や単行本の発売など幅広い活動をしている。また、峯田は何度かほかのアーティストに楽曲提供を行なっているが、今回の論文作成において研究対象とするのは、峯田自身のバンド、ゴイステと銀杏 BOYZ のアルバム全 26 枚、楽曲全 164 曲とする。

峯田の存在を特別にするものは数多くあるが、やはり中でも大きな要因は特徴的な歌詞であろう。ライブパフォーマンス中の脱衣による 2 度の書類送検などをはじめとするクレイジーな行為が印象強い峯田が書き出す歌詞。それは、「やばい奴が書いた」といったような形容がふさわしいほどに奇抜なものである。しかし、ただ単にクレイジーで独特なだけが魅力ではない。本当の魅力は、露骨過ぎる表現とその説得力である。

- GOING STEADY 及び銀杏 BOYS の活動

この章ではそれぞれのバンドについてももう少し掘り下げてみたいと思う。銀杏 BOYZ の著書『GING NANG SHOCK! ギンナン・ショック 上 ~「目覚めよ」と叫ぶ声あり~』『GING NANG SHOCK! ギンナン・ショック 下 ~21 世紀につぼん青春大冒険記~』を参考資料とし、2007 年頃

までの各バンドの活動を辿った。

ゴイステは、1996年の春、峯田が大学に進学した峯田が、同級生の浅井をドラムとしてバンドを組んだのが発端である。2人は70年代から今日に至るまでの洋邦のパンクロックを好んでおり、その影響からバンド結成を決めた。やがて峯田が知り合った1つ年下の安孫子がベースとして加入し、ゴイステの活動がスタートした。初ライブも決行し、観客も徐々に増えていった。そんな峯田の姿を見守っていたのが、峯田の高校時代の同級生、村井だった。村井は卒業と同時に東京の専門学校へ進学し、峯田と共に上京した。峯田が友達やバンド活動に時間を割く中、言語障害や妄想癖を持ち合わせる村井は孤独になっていった。そんな中「何かをやろうとしている」峯田の姿に影響を受けた村井はドラムの練習をはじめ、やがて1998年にゴイステにドラムとして加わることとなる。

村井の加入を機に、さらなる幅広い活動を展開したゴイステは1999年6月に1stシングル「YOU & I」の発表を皮切りに立て続けに作品をリリース。2001年5月には代々木公園野外ステージで「東京初期衝動」と題してフリーライブを決行し、5000人以上の観客を集めた。

このようにして徐々に人気を集めていったゴイステだったが、そんな彼らのステージは当時の音楽シーンを逆行するようなものだった。というのも、90年代の音楽シーンは「洋楽の様な振る舞い」を良しとするきらいがあった。しかし、彼らのこの時期の作品はどれも日本語であり、著しい山形弁でMCを行ったジャージ姿の峯田が、一生懸命演奏している最中のメンバーにドロップキックをする。いわば背伸びした音楽シーンの真逆をいくパフォーマンスを披露していたのがゴイステだ。

その後もゴイステ人気は加速し、2002年にはメンバーが共通して影響を受けたというGREEN DAYのライブにフロントアクトとして出演するなど、活動の場を広げていく。6月にリリースした「童貞ソー・ヤング」はオリコン3位を記録し、テレビ朝日の「ミュージックステーション」でも紹介された。秋にはゴイステ自身のレーベル「初恋妄°C学園」を設立し、それまでよりもさらに幅広い活動展開が期待された。

しかしながら、12月にリリースされた「若者たち/夜王子と月の姫」がオリコン5位を記録し、ツアーを目前に控えた翌年1月15日、人気絶頂時にゴイステは突然の解散を発表した。解散の詳しい理由については参考資料においても語られていなかった。

ゴイステ解散時、峯田は「俺は一人でも唄っていくからよ。心配しなくて良い。今までありがとう。」と村井に語った通り、ソロユニットとして銀杏BOYZの活動をスタートさせた。現メンバーが揃うまでにはエレファントカシマシのカバーアルバム「花男」の参加し、「悲しみの果て」をカバーした。しかし、その後バンドサウンドが恋しくなった峯田は悩んだ挙句、安孫子と村井に再びバンドに加入するよう申し出た。2人が加入の決意を固めている間、峯田はギタリストとしてチン中村に

目をつけていた。チン中村はゴイステ時代にメンバーと知り合っており、この頃はすでにソニー・ミュージックの経理部で働いていたが、「本当にやりたいこと」に感じた銀杏 BOYZ への加入をやがて決意し、銀杏 BOYZ のメンバーが揃った。

ライブ活動を重ねながらバンドの結束を強めていった銀杏 BOYZ は、約一年にも及ぶレコーディング期間を経てデビューアルバムの「君と僕の第三次世界大戦的恋愛革命」「DOOR」を完成させる。2005 年 1 月 15 日、ゴイステ解散からちょうど 2 年後に 2 枚同時リリースという異例の形式で発売された 2 枚のアルバムにはゴイステ時代からの楽曲や真新しい新曲が収録されており、後に 2 枚併せて約 30 万枚のセールスを収め、当時のインディーズとしてはメガヒットとなった。

アルバムリリース直後、初めての座席指定ライブ「不登校生徒集会 イン 渋谷公会堂」を終えた後、全国 44 本にも及ぶ「世界ツアー 2005」がスタートした。銀杏 BOYZ が敬意を表す各アーティストの他に、あらかじめ募集した会場近隣に住むアマチュアバンドを招くなどして、独創的なステージ演出が考えられ、過剰な盛り上がり期待された。しかし、ツアー初日、熊谷 VOGUE（現 HEAVEN'S ROCK 熊谷 VJ - 1）での 1 曲目、峯田は肋骨を折る。2ヶ所目までの公演は強行したものの、診断の結果を受け、以降 5 公演を順延する。復活後は順調に公演を進めていったと思われたが、終盤の長野公演にて今度は右足を骨折し入院。2 度目の中断を余儀なくされる。

ツアーが延長される中、銀杏 BOYZ は夏のイベントにも複数出演した。そのうちのひとつである「ROCK IN JAPAN FES 2005」ではパフォーマンス中に峯田がパンツを脱いだことで公然わいせつ容疑となり、後に書類送検された。その後、順延に順延を重ねたツアーを終えた銀杏 BOYZ はその熱が冷めぬまま初の日比谷野外音楽堂公演「野外毒演会 2005～こけし軍団、起立!!～」当日を迎えた。しかし、峯田は 3 曲目の時点で、完治しかけていた右足を再び骨折した。普段よりも歌詞を飛ばすことが多かったが、ファンやメンバーに気付かせないまま峯田は全曲唄いきった。

翌年の 2006 年にはマネージャー・斉藤のハワイでの挙式に参加した後、銀杏 BOYZ にとって聖地とも言えるサンフランシスコへ渡り、現地のライブハウスで飛び入りライブを行った。その一方で国内でも各イベントへの出演や、雑誌を中心とした各媒体への出演も増えていった。

参考 銀杏 BOYS [2007] 『GING NANG SHOCK! ギンナン・ショック 上 ～「目覚めよ」と叫ぶ声あり～』白夜書房/銀杏 BOYZ [2007] 『GING NANG SHOCK! ギンナン・ショック 下 ～21 世紀にっぽん青春大冒険記～』白夜書房

- 峯田和伸の人物像

峯田和伸の作品について言及する前に、彼の人物像を改めて明らかにしておきたい。この章を通

して、峯田が自身のブログより厳選した 150 のストーリーを収録した『恋と退屈』を参考資料に用いた。

峯田を一単語で表現する場合は、間違いなく「変態」だろう。

あああああ女の子とプール行きてえー!!女の子じっくりみながら、流れるプールに身を任せてプカプカ浮いていたい。そのまんま彼女のお尻に接近してかぶりつきたい。これこそが僕の求める最高の夏だ。股間の腫れあがる極上の夏だ。1)

変態要素あふれるこの文章は『恋と退屈』第十二話「僕はどこにも属さない」の文中から抜粋したもので、同エピソードは、ホリデーシーズンにうかれる世間とは対照的に、スタジオにこもる自身のみじめな姿への嘆きや、中国人のマッサージを受けた後に自身の禁欲生活が終了した報告などによって構成されている。

峯田は「格好いい」という言葉からは程遠い人間である。容姿もボサボサのヘアースタイルに青髭を生やして、だらしのない上半身を露出して歌う姿が印象強く、決して華があるなんて言えない。ゴイステ及び銀杏 BOYZ はそんな峯田を中心とし、その人物像を反映した楽曲やパフォーマンスで多くのファンを魅了してきた。

次は「格好良さ」に関する 2 つの言及から峯田の人物像を考えてみよう。一つ目は、『恋と退屈』の第一話「アロエジュース飲むと小便がアロエの匂いがします」からの引用である。

帰り道、みんなと機材車に乗って FM 聴いてたらバンプ・オブ・チキンがインタビューされてて新曲も流れてた。いい曲だ。なんか、話し声とかすげー大人っぽくて、笑い声もクールで、カッコいいよ。ふと後部座席に座ってる銀杏メンバーちゃんたちの声が聞こえて、あまりに下品極まりない笑い方、奇声の数々に愕然としたよ。きつとこうゆう事なんだなーって思った。素直に。明日もあさっても僕はこの人たちと曲を作ってゆく。万歳だ。2)

この部分からは、峯田の、自身やバンドメンバーたちに対する認識が読み取れる。笑い声でさえもクールな BUMP OF CHICKEN とは対照的に、奇声をあげ、下品に笑う銀杏 BOYZ の姿を見て、愕然とし、それを「こうゆう事」と表現した峯田。しかし、最後には、「万歳だ。」と文章を締めくくっており、まるで、自身を含む銀杏 BOYZ のだらしなさを喜んで受け入れているかのようだ。そう、峯田やメンバーたちは初めから誰もが目を奪われるようなビジュアルや言動の格好良さは求めている

ない。

では、峯田は何をカッコいいと捉え、目指しているのか。その答えに近い記述が『恋と退屈』第十三話「もう一度笑ってみせて」にある。

東京の今日の最高気温 40°Cは観測史上最高だそうだ。こんな時期に汗だらだらかいて、ピチピチのジーパンを穿いて無理してるような「もさい男」が僕は大好きなんだ。もさい男とは、ただひたすら「濃い」こと。無理をすること。決して薄くならず、さわやかにならない。香水つけるなんてもってのほかだ。[中略]一緒に遊びにきたボーカリスト松本君も素晴らしく濃かった。黄色い汗かきまくって辛口のタイ料理をむしゃぼりつく姿に感動した。しかも彼はまわりの誰よりも早く完食しなければならないとゆう使命感を背負っている。カッコいいと思う。もさい男とは「恥」というものを知っている。そしてそれを他の誰かに伝えることでその人なりの「表現」へと繋がってゆくんだ。3)

ここでは、峯田がかっこいいとする「もさい男」という言葉が登場する。もさい男とは、人目を気にせず、ワイルドな振る舞いをするただ清潔感のない人物、とものとれる。しかし、峯田がかっこいいするのはあくまでそこではない。恥を知り、それを人に伝え、表現というものに昇華させるような生き様をした人物を峯田はカッコいいとしている。確かに峯田の作詞のスタイルとして、聴いていて恥ずかしくなるような歌詞も多い。しかし、そんな歌詞からメッセージ性を感じて聴くファンの存在が彼の目指す表現が成立しているということの証なのだろう。

そんな峯田和伸だが、『恋と退屈』の第二話「アイ・ダンス・アローン」では、大学にてバンド活動を始める前、つまり音楽を始める前の高校時代の自身の様子を語っている。

「趣味は何ですか？」と聞かれたら、十秒ぐらい考えて「……音楽鑑賞です」なんてボソッと答えそうな普通の男子。何やっても普通、毎日が普通、人畜無害。表面上はね。でもね、実は僕、誰にも言えない秘密があったんだな。ほんとうは頭がオカシかったの。夜の二時。家族が寝静まったのを見計らって家をこっそり抜け出し、金属バットをもって自転車で二十分かけて真っ暗な山を登っていった。うっそうと生い茂る竹林スポットをみつけると、周りに本当に誰もいないか確認した。ポケットに入っているカセットウォークマンの音量をフルにする。するとビートルズのカセットテープはたちまちノイズの大洪水に変わる。ジョン・レノンが絶叫して泣きわめいている。「DON'T LET ME DOWN」が「俺なんて死んじゃまえ」に聴こえる。僕は踊りだす。バットで竹をぶった切る。指から血が出てる。爪がはが

れてる。4)

自他ともに認める「ごく普通の男子」という普段の顔と、まれに狂気的な行動に及ぶ「頭がオカシイ男子」の二つの顔を持ち合わせていたという峯田。これはあくまで高校入学当初のエピソードだが、峯田和伸という人間の人物像がかなり読み取れる。実際に峯田が映っているインタビューやライブの映像を見ると、彼の口調は山形弁交じりの非常に穏やかなものなの分かる。しかし、その中でも汚い言葉遣いやモラルのない発言なども見受けられ、一たびパフォーマンスが始まると、服を脱ぎ、乱暴な歌声で歌う過激な歌詞の楽曲をオーディエンスに聴かせる。そんなパフォーマンスのスタイルこそまさに峯田の「頭がオカシイ」部分なのだろう。今や人々を虜にしている彼の狂気は、学生時代から存在していたようだ。ちなみに同エピソードにて、峯田はその自身の狂気のことを、「なにが原因でわけでもない」「僕の中のドロドロ」5)などと表現している。

参考 峯田和伸[2006]『恋と退屈』河出文庫

- 歌詞の特徴その1「露骨過ぎる表現」

前述のように、露骨過ぎる表現は峯田が書き出す歌詞の魅力の一つである。なぜあえて露骨「過ぎる」と表現したのかと言うと、我々が一般に言う直接的な歌詞とそれとでは、また一つ異なるものであるからだ。

峯田は歌詞の中に卑猥な単語をもろに用いることが非常に多い。研究対象の全164曲のうち、約3分の1の54曲において卑猥な単語または表現が使用されていた。それ以外に暴力的な言葉も頻繁に使われている。このように過激な表現が頻出する峯田の楽曲は、ピッチ補正とは無縁なヴォーカルスタイルも相まって、「無修正」と形容されることもある。

露骨という単語は、直接的・ストレートなどの言い換えがあるが、直接的な表現とえば、「大好きだ」「愛してる」「忘れられない」などのよくある歌詞が思い浮かばれる。しかし、峯田の言葉はこれらよりも生々しい。

例①「あの娘に1ミリでもちょっかいかけたら殺す」(銀杏BOYZ[君と僕の第三次世界大戦的恋愛革命]2005)

過激な表現が使用されている楽曲の一例として、「あの娘に1ミリでもちょっかいかけたら殺す」

の歌詞の一節を用いよう。

「僕にとって君はセーラー服を着た天使 もしもモーニング娘。に君がスカウトされたらどうしよう もしも君がいないと僕は登校拒否になる」という A メロから始まるこの楽曲の舞台は学校であり、ヒロインである同級生に対する思いを綴っていることが分かる。その後の歌詞から、ヒロインの母親が再婚相手を見つけたことにより、ヒロイン家族の引っ越しとヒロインの転校が決まったところで歌はサビに突入する。

「君のパパを殺したい 君のパパを殺したい 君のパパを殺したい 僕が君を守るから」。ヒロインに対する強い気持ちに、「パパを殺す」という表現が用いられていることで、主人公の思いの強さや、極めて単純でまっすぐな性格がうかがえる。

- 歌詞の特徴その2「説得力」

峯田の作品のもう一つの魅力は、彼の言葉の説得力にある。

青春パンクバンドというジャンル表記もされるゴイステ及び銀杏 BOYZ の楽曲の9割は若者の恋愛について言及したラブソングである。しかし、ラブソングとは言っても、綺麗、もしくはキザな愛の言葉を並べたような純情なものでは決してないことはもはや言うまでもない。だからと言って、弱みをあえて見せるような失恋ソングなどともまた異なる。峯田の綴る歌詞に登場する主人公はどれもみな醜く情けない。冴えないしモテない陰キャの童貞オタク。まるで峯田本人のような主人公のキャラクターが、どの楽曲にも共通している。

例② 「十七歳(・・・cutie girls don't love me and punk.)」(銀杏 BOYZ [DOOR]2005)

童貞オタクキャラが特に際立っている作品としては、タイトルから既にひねくれ具合が垣間見えるこの楽曲が例に挙げられる。

この楽曲は1分24秒という比較的短い時間ながら、ただ叫ぶような歌い方と印象強い歌詞により、銀杏 BOYZ のファーストアルバム、「DOOR」の中でも存在感のある一曲だ。

イントロというイントロはなく、乱暴に語り掛けるような峯田の歌いだしから始まる。

「あいつらが簡単にやっちゃう30回のセックスよりも 『グミ・チョコレート・パイ』を青春

時代に一回読むってことの方が 僕にとっては価値があるのさ 現実なんて見るもんか 現実なんて見るもんか」。「グミ・チョコレート・パイン」とは、大槻ケンヂの半自伝的小説で、のちに漫画化及び映画化もされている。映画化の際には、峯田も AV 男優役として登場している。内容は、17 歳の冴えないサブカル好き男子高校生がクラスのヒロインに恋をする青春物語であり、まさにそれは峯田が描き続けるような主人公像にぴったりと言える。そんな「グミ・チョコレート・パイン」をたった一回読むことの方が、同級生が容易く行う性行為よりもよっぽど価値がある、と彼は主張する。だがそれはあくまで主張に過ぎず、後半 2 回繰り返される「現実なんて見るもんか」というフレーズから、本当は「あいつら」を羨ましがり、妬んでいることが読み取れる。

B メロにおいてもこれと同じ構文が使われている。「あいつらが簡単に口にする 100 回の『愛してる』よりも 大学ノート 50 ページにわたってあの娘の名前を書いた方が 僕にとっては価値があるのさ 現実なんて知るもんか 現実なんて知るもんか」。普通の人々が「愛してる」と言葉にして愛情表現する中、そんな勇氣もなく不器用な彼は大学ノートにひたすら好きな娘の名前を書くことしかできない。これ程までに情けなく、格好のつかない主人公はかつていただろうか。

なぜこのような格好悪い主人公目線の歌詞が、当時から現在に至るまで、一定の若者の心を掴んでいるのだろう。理由は簡単で、そんなキャラクターこそが多くの若者にとっての等身大だからである。

例③「SKOOL KILL」(銀杏 BOYZ[君と僕の第三次世界大戦的恋愛革命]2005)

例①と同じアルバムに収録されている「SKOOL KILL」も変態的なキャラクターが読み取れる歌詞が印象的だ。

「学校で君のジャージが盗まれた事件があったら 誰にも言えないけど本当は犯人は僕さ」、「体育の授業ドリブルする君のおしりはミルクたっぷりの苺さ」、「音楽の時間君が吹くたて笛に僕は変身するのさ」、「そいつが君のおしりの辺りに手をあてた時僕は走って逃げて CD 万引きしたんだ」

これらが特に主人公の変態的キャラクターを印象付けるフレーズのいくつかである。まるでモラルにかけているこれらの歌詞の内容は、多くの人からしたら「何を言っているんだ」という感想が浮かぶだろう。しかし、この醜い歌詞こそが一定の層には刺さるのだ。実際にジャージや縦笛を盗んだりした経験をした人なんてもちろんそうは居ない。しかし、行動には移さないまでも、やってみたくらい一瞬でも思いついてしまった人ならどうだろうか。男子中高生の頭の中なんてそんなものである。そんな、たとえ友達にすら打ち明けられないような男子たちの頭の中を声高らかに歌い出したのが峯田なのである。誰もがみな憧れるようなカッコいい存在からは到底かけ離れているが、醜く

情けない自身の姿を理解しながら胸を張ってなんでも素直に歌詞に書き落してしまう。そんな峯田の姿は、多くの男子にとって等身大であり、新しい形の憧れとなったのだ。

「休み時間に君にちょっかいをかけるサッカー部のあの野郎をぶん殴ってやりたいのさ」という B メロのフレーズは、このアルバムで次に収録されている例①の「あの娘に 1 ミリでもちょっかいかけたら殺す」との一貫性も感じられる。

- 「君」「あの娘」と「宇宙」

峯田が手掛ける楽曲の中でも大半を占めるのがラブソングであり、もちろんそれぞれヒロインが登場する。峯田はヒロインを「君」や「あの娘」という表現で楽曲に登場させるが、同じくらいの頻度で使用されるのが「宇宙」に関する表現だ。それが意図的であるのか、あるいは無意識にそうなっているのかは定かではないが、これについて私なりに意味合いを考えてみた。

峯田は生まれ持った変態性とは別に、純情な恋をすることも多い人間だった。しかしながら、生涯を通して交際した人数は僅か 3 人のみであり、「モテ」とは縁のない人生を歩んできた。その分女性に対するあこがれの思いは人一倍強かった。そのためか、峯田の作品に登場するヒロインは、遠いところにいて手の届かないような、どこか儂い描かれ方をすることが多い。宇宙に関する表現が頻繁に使用されるのは、峯田の視点から女性という存在自体の儂さや尊さを表現するためだと私は考察する。

具体的な歌詞の例として、ゴイステと銀杏 BOYZ の楽曲の中でも 1 番アイコンックとも言える「BABY BABY」の歌詞から見ていこう。

町はイルミネーション 君はイリュージョン 天使のような微笑み [中略]

甘いシュークリーム 君はシュूपリーム 月面のブランコは揺れる

夢の中で僕等 手をつないで飛んでた 目が醒めて僕は泣いた

この楽曲では「君」というヒロインに対し、「イリュージョン」、「天使」、「シュークリーム」という言葉を用いている。これらの言葉を使うことにより、主人公視点の「君」がまるで実在しない創造物であるかのように完璧である存在だということが読み取れる。そして、後半の歌詞に注目すると、ヒロインが登場する夢から醒めるという描写がある。単に眠っている状態から目がさめる場合は、通常「覚める」の表記をするところ、ここでは「醒める」という漢字があえて使われている。それによ

り、ただヒロインが登場する夢をみた話ではなく、ヒロインはあくまで主人公の妄想の世界でのみ生きる創造物だということも考えられる。さらに、「月面のブランコ」、という非現実的な物を描写することにより、現実と夢と妄想、ヒロインが実在するのかもしれないのか、いずれにしても「君」は手の届かないような遠い存在であることが読み取れる。

次の例は、GOING STEADY の 1st シングル「You & I」の歌詞だ。

You and I, now and forever...

きらきら光る星空の下 遠く君は離れていた

さけんでみたよ さけんでみたよ君の名前

この楽曲に関しても、「星空」という天文的なワードが使われている。それに合わせて「遠く君は離れていた」と今回は直接的に「君」が遠い存在であることが描写されている。後半の「さけんでみたよ君の名前」という部分からは、「さけんだよ」ではなく「さけんでみたよ」ということにより、「返事は返ってこないが、さけんでみた」というような補足が考えられる。このように、この楽曲に登場するヒロインも、実際に近い関係にないのか、そもそも実在しないのか、返事が返ってこないと思われる理由は定かではないが、いずれにしてもヒロインが遠い存在であることが表現されている。

● 参考文献

- ・銀杏 BOYZ [2007] 『GING NANG SHOCK! ギンナン・ショック 上 ～「目覚めよ」と叫ぶ声あり～』 白夜書房
- ・銀杏 BOYZ [2007] 『GING NANG SHOCK! ギンナン・ショック 下 ～21 世紀につぼん青春大冒険記～』 白夜書房
- ・峯田和伸[2006] 『恋と退屈』 河出文庫

● 脚注

- 1) 峯田和伸[2006] 『恋と退屈』 河出文庫, p.30

- 2) 峯田和伸[2006]『恋と退屈』河出文庫, p.9
- 3) 峯田和伸[2006]『恋と退屈』河出文庫, p.32
- 4) 峯田和伸[2006]『恋と退屈』河出文庫, p.10
- 5) 峯田和伸[2006]『恋と退屈』河出文庫, p.11